

石川県におけるイヌワシの分布および個体数

上 馬 康 生 石川県白山自然保護センター

DISTRIBUTION AND POPULATION OF THE JAPANESE GOLDEN EAGLE (*AQUILA CHRYSAETOS JAPONICA*) IN ISHIKAWA PREFECTURE

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center*

I はじめに

生息地が山岳地帯の深い谷であり、行動域が非常に広く、また繁殖期間の長いことなどのため、イヌワシの調査は困難で、しかも長期間を要する。そのため、わが国における調査研究は少なく、最近になって全国数カ所で行なわれるようになったばかりである。今までに発表されたもので詳しく調べられているのは立花(1969)と重田(1974)があるくらいである。

石川県においても、観察記録は数例発表されているが、詳しい調査報告は全くなかった。そこで県内での生息状況を知るため、1977年より調査を行ってきた。その中から、今回は分布ならびに個体数について述べることにする。なおこの報告は県鳥イヌワシ保護調査事業として県が実施しているもの中間報告である。

この稿を草するにあたり、アンケート及び聞き込み調査に御協力いただいた多くの方々、県内における文献を教えていただいた松田衛氏、また現地調査を手伝っていただいた金沢大学理学部生物学科の多くの学生、特に中村正登氏、加藤晃樹氏、浦野栄一郎氏、池田善英氏に深く感謝の意を表する。

II 調査方法

県内全域の分布状況を把握するためのアンケート調査と、生息確認ならびに行動観察のための現地調査を中心に、聞き込みや文献による調査を加えて資料を集めた。

アンケート調査は別表の様式により、イヌワシの観察年月日、観察場所、羽数などの資料を集めるとともに、剥製の所在や情報提供者を知る目的で1978年3月に行なった。対象としたのは市町村林務課、林業事務所、営林署担当区、自然公園指導員、猟友会会員、野鳥の会会員などイヌワシについての関心や、実際に見る機会のあると考えられる機関や個人である。調査範囲は県内全域と、隣接する富山、福井、岐阜の各県の一部である。ただし集計には、その中から本県に関係する記録のみを用いた。

次に現地調査は金沢大学理学部生物学科の学生の協力のもとに、生息の予想される地域へ入りイヌワシの確認に努めた。そして一部の地域においては、行動域や隣接する番との関係、巢の場所などを明らかにするため、トランシーバーを用いて同時観察を行なうことにより行動を追跡した。

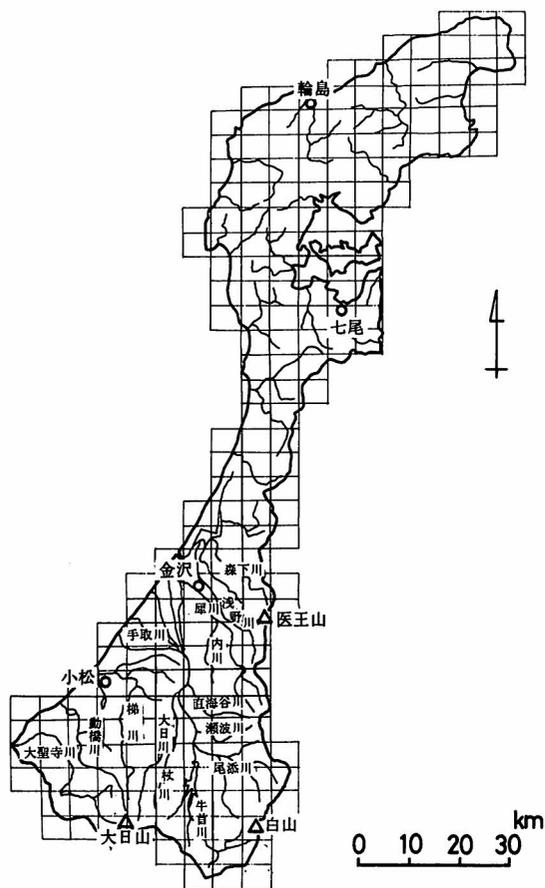
III 結果および考察

1. アンケート調査

アンケートの発送数は327通で、回収数177通、回収率54.1%であった。その中で「今までにイヌワシ(らしい鳥)を見たことがある。」と回答したものは60通、また「イヌワシがいる、または昔いたことがあるという話を聞いた」と回答したものは34通であった。

イヌワシは発見の比較的困難な鳥で、全国的には観察例はあまり多くない。ところが今回のアンケート調査では多くの観察例が報告された。これはこの鳥が本県の県鳥として一般の人に広く知られていることの現われのひとつとみることができる。なおトビやクマタカなどの誤認を疑ってみる必要はあるが、その後の現地調査で確認している地域が多く、大部分は信頼できるものと思われる。その中から、同一の記録と考えられるものや、記載が不十分なもの、また誤認である可能性の強いものを除いて以下の集計を行なった。なお分布図作成においては第1図のように、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を縦横2等分して作った1区画を単位とするメッシュ図で表現した。

記録された年を昭和29年以前、昭和30年～39年、昭和40年～49年、昭和50年以後の4区分にすると第1表のようになる。なお区分の際、明確な記載のないもの、たとえば昭和51年～53年等は処理上1例とした。また2つ以上の年代にわたるもの、たとえば昭和48年～53年等は昭和40年～49年、昭和50年以降それぞれ1例ずつ2例とし、20年前から現在までのような例は3例とした。記録例数は合計138例である。昭和50年以後の記録例が全体の約半数を占め、近年の記録の多いことを示しているが、過去の記録も多く、イヌワシの存在が昔から知られ



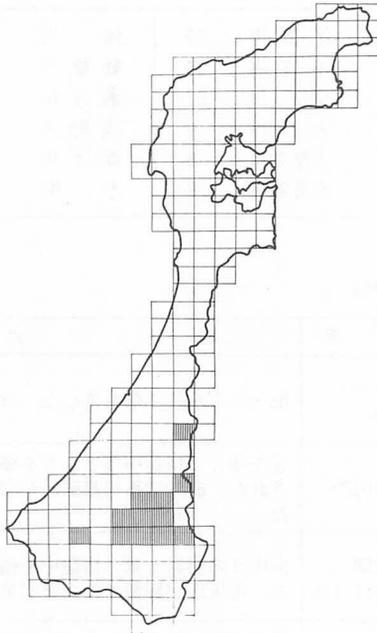
第1図 集計メッシュ図

第1表 年代別イヌワシ記録例数

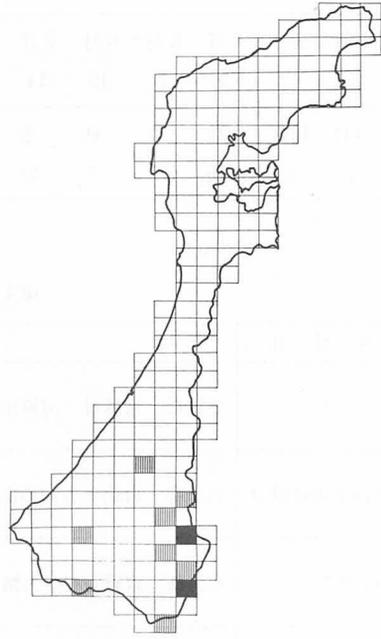
昭和29年以前	20
昭和30年～39年	19
昭和40年～49年	37
昭和50年以後	62

ていたことがわかる。次に、これら138例について記録された月(季節)別にみると第2表のようであり、4月～7月に集中している。また記録された場所を水系別に集計すると第3表のようになり、尾添川、牛首川、犀川の3つの水系から多く記録されていることがわかる。そしてアンケートに

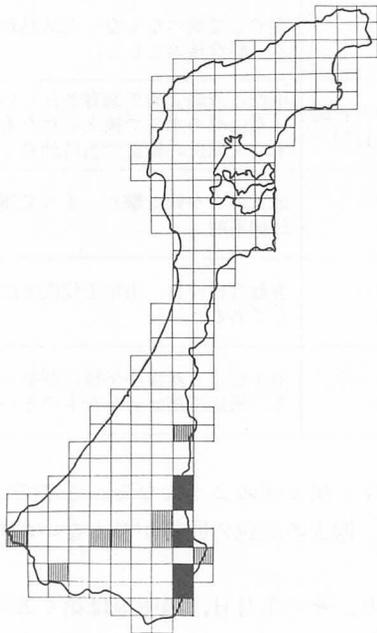
上馬：石川県におけるイヌワシの分布および個体数



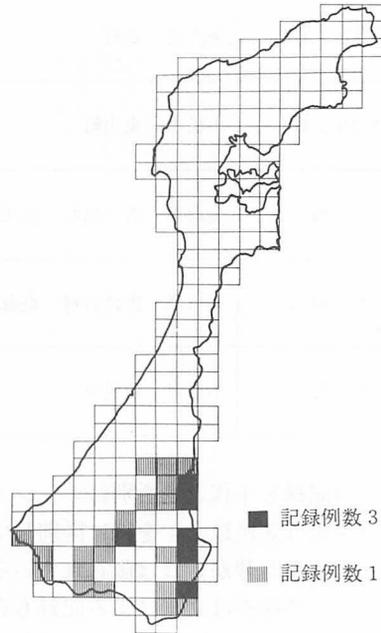
昭和29年以前



昭和30年～昭和39年



昭和40年～昭和49年



昭和50年以前

■ 記録例数3以上
 ▨ 記録例数1～2

第2図 アンケート調査による各年代別のイヌワシ記録分布

第2表 月(季節)別イヌワシ記録例数

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
2	0	3	7	7	10	14	5	3
10月	11月	12月	春	夏	秋	冬	無記入	
2	4	2	16	7	7	11	38	

第3表 水系別イヌワシ記録例数

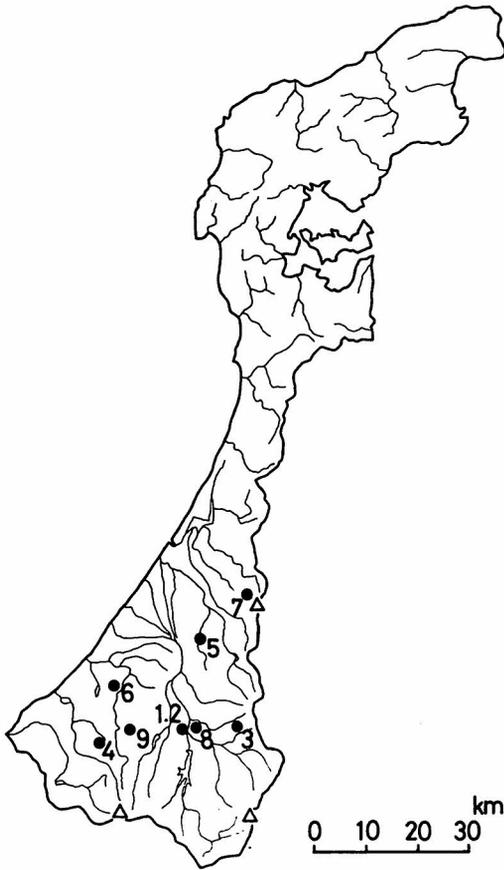
尾添川	35	梯川	5
牛首川	33	動橋川	4
犀川	27	瀬波川	4
大日川	9	浅野川	2
大聖寺川	8	森下川	1
直海谷川	6	不明	4

第4表 イヌワシ捕獲例

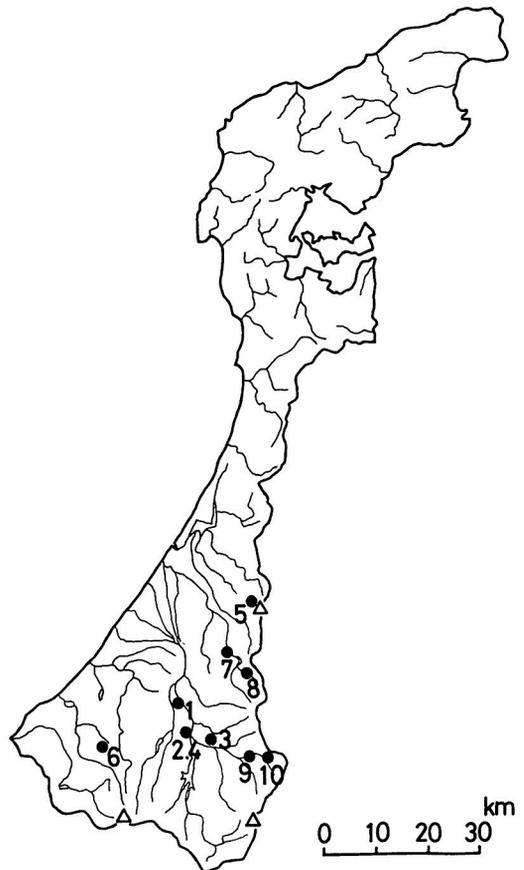
番号	年月日	場所	出典	概要
(1)	1927年頃	石川県 鳥越村 河原山山頂	アンケート No.1279	地元の人が銃で撃ち落した。詳細不明
(2)	1946年10月21日	石川県 白山下方面の山地	市川(1947)	猫を捕えて格闘中のところを棒で撲殺された。成鳥で市川昌徳氏が剥製にした。
(3)	1947年	石川県 吉野谷村 大瓢箪山中腹	北国新聞 (1964, 11, 10)	出作りの裏庭で猫と格闘中を捕獲された。市川氏が剥製にして金沢美大へ。
(4)	1959年4月11日	小松市 滝ヶ原町 三童子山	市川(1959)	標高 430m 黒岩の巣より雛2羽捕獲された。1羽は粟津町, 他の1羽は金沢市で飼育された。
(5)	1959年7月	金沢市 堂町	市川(1965)	疲労して飛べなくなった幼鳥が拾われる。飼育後逃亡した。
(6)	1960年2月	小松市 東山町	北陸中日新聞 (1964, 1, 12)	小松市芦城公園で飼育されているワシは東山町の水田で捕えられたもの, 正木助次郎氏の鑑定で当時幼鳥1年目。
(7)	不明	金沢市 田ノ島町 (医王山)	アンケート No.1178	地元の人が銃で撃ち, 4人で運んだ。詳細不明。
(8)	不明	石川県 吉野谷村 高倉山	アンケート No.1195	吉野谷村佐良, 山田千代氏宅に剥製としてある。
(9)	不明	小松市 西俣町	アンケート No.1166	旧小松市立西俣小学校に剥製としてある。当地で捕えられたものという。

よる県内での記録を年代と場所別にメッシュ図にして表わすと第2図のようになる。ここでは記録例の多いメッシュ(3例以上)を特に区別して表わしてある。過去の記録の回答が多くないので断定はできないが、分布が昔からほぼ限られているようである。

次にイヌワシの捕獲は文献による記録も含めると9例あり、その年月日、場所等は第4表のようであった。これを図に表わすと第3図のとおりである。記録の明確なものは約20年以上前のものであり、最近の例が全くみられない。この中で特に注目されるのは例(6)のもので、現在も生存しており、捕獲当時生まれて1年目だと推定されているので今年(1980年)で21年目になる。なおイヌワシの寿命は野生では10数年と推定されているが、確実な記録はない。また飼育記録としては、わが国では宮城県に21年6ヵ月(立花・私信)が知られている。



第3図 イヌワシ捕獲場所



第4図 イヌワシの巣確認場所

2. 現地調査

アンケートや文献により判明した地域や、その他で生息が予想される地域へ入り調査した結果、生息を確認できた場所は第5図のとおりである。この中には前記4名の学生からの情報も含まれている。なお頻繁に観察される地域では、主要な場所のみプロットしてある。特に犀川上流域と尾添川に観察例が多いが、これには調査回数の多いことも関係している。その他の地域での調査回数はまだ十分でなく、今後の調査で確認される場所が増えることが予想される。次に現地調査で発見できた巣は3か所あるが、アンケート及び文献による観察記録も含めて第4図及び第5表に示したとおりである。この中で例(7)~例(10)の地域にはイヌワシの生息が確認できており、その他も例(1)を除いた地域はアンケート等で記録されているか、あるいは近くに生息の確認された場所がある。

<分布図>

イヌワシは行動域が広大で、寿命が比較的長く、また定着性の強い鳥であることを考慮するなら、現地調査による確認ができていなくても、近年の記録のある地域には現在も分布していることが十分に考えられる。そこで現地調査による記録、およびアンケート調査で報告のあった昭和40年以後の記

第5表 イヌワシの巣確認例

番号	場 所	出 典	概 要
(1)	石川郡 鳥越村 釜清水	横山 (1866)	鷹巣と呼ばれる山(一名虎狼山)に鷹の巣があった。現在の地図では岳峰と記されているところである。採石のため岩壁はかなり崩れている。
(2)	石川郡 鳥越村 河原山	横山 (1866)	立壁と呼ばれる岩に鷹の巣があった。(4)のアンケートと同じ地域であり、イヌワシの巣と推定される。
(3)	石川郡 吉野谷村 中宮	アンケートNo.1153	明治時代に巣があり、雛にヘビやウサギを運んでいたという。
(4)	石川郡 鳥越村 河原山	アンケートNo.1330他	大正時代、岩壁の杉の木に巣があり、それを中心に2羽でよくせん回していた。幼鳥も観察している。近くに別の岩壁の巣あり。
(5)	金沢市 二俣町(医王山)	アンケートNo.1178	昔、鷹ノ巣岩として知られていたところがある。「鳶岩」付近にも巣があったという。
(6)	小松市滝ヶ原町三童子山	市川 (1959) 他	標高 430m の「黒岩」に巣があり雛が捕獲される (1959年 4月11日)。それ以前から生息していたという。
(7)	金沢市 見定	能野, 木村(1970)	詳細不明。なお現地調査で同地域に巣を発見している。
(8)	金沢市 倉谷	現地調査	1974年 5月13日雛のいる巣を発見。1975年以後は未使用。
(9)	石川郡 吉野谷村 蛇谷	現地調査	巢材の積まれた岩壁の巣, 少なくとも1978年以後は未使用。
(10)	石川郡 吉野谷村 蛇谷	現地調査	巢材の積まれた岩壁の巣。

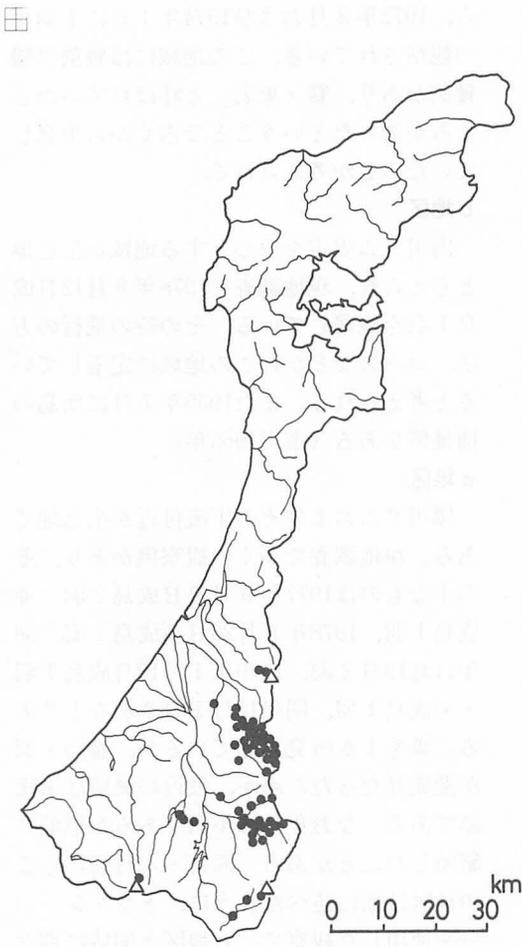
録をもとに一部推定を含めて県内における分布図を作成した(第6図)。

この図からイヌワシの分布が県中部以南の山地にかたよっていることがわかる。すなわち医王山から白山に続く山地と、大日山を中心としてその北方および西方に続く山地である。そして平野部と県中部以北には過去、現在を通じて全く記録はなかった。これはその地域が早くから開発され、十分な餌の供給できる広範囲にわたる自然環境のすぐれたところがないことや、山地に深い谷や営巣できる岩壁がないことなどが原因と考えられる。また白山と大日山の間には、記録のない地域があるが、分布の可能性もあり今後の調査が必要である。

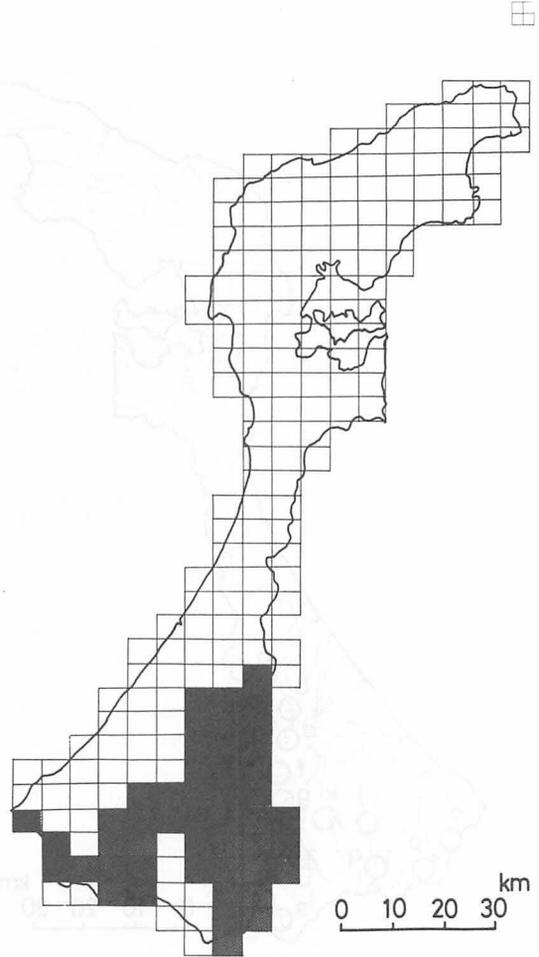
<生息地>

現在県内に生息するイヌワシの各々の、生活の根拠地として周年利用している生息地とその数を推定してみる。その際最も問題となるのは、ある地域で観察された個体が別の地域で観察された個体と同一であるか否かの証明である。飛翔力がすぐれ、行動域の広い鳥であるので同一個体を見ている可能性が十分考えられる。そこで個体識別が必要となってくるが、至近距離で観察することや常時の観察ができないので容易ではない。ある地域の個体に関しては翼羽や尾羽の欠損および翼の腹面の羽毛の白色部分の形によって識別ができた。しかしこの方法では長期にわたる識別は困難である。

この問題に対する解決策の1つとして、トランシーバーを利用した同時観察は有効であった。これは観察者が2~3か所に分散して、互いに連絡をとりながらイヌワシの行動を追跡するのであるが、その際に異なる地点で同時に別個体を観察できることがある。今までに周年生息が確認できているある地域において、同時に番と考えられる2組をそれぞれ別の場所で観察できたことがあり、その地域



第5図 現地調査によるイヌワシ確認場所



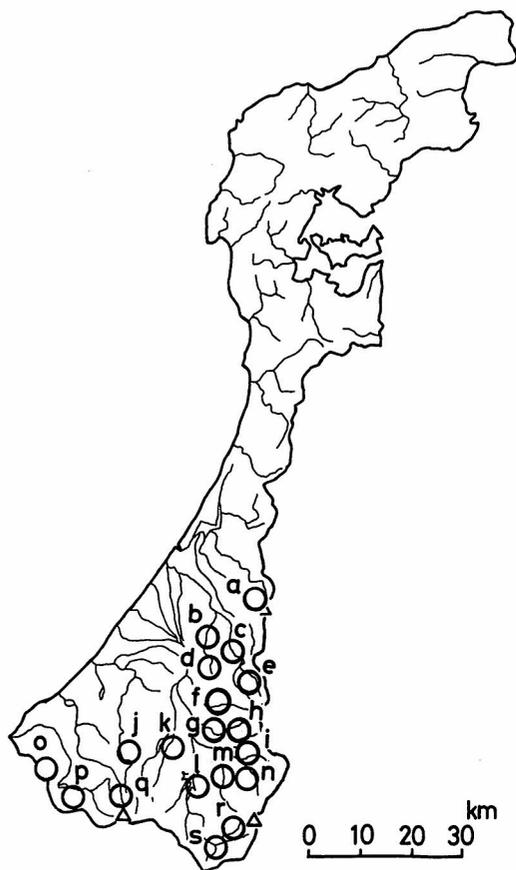
第6図 イヌワシ分布図

に2番の生息が確認できた例がある。また別の地域においても同様の観察例がある。

これら2例の地域においては、現地調査の回数も多く、しだいに生態学的な資料が蓄積できてきた。その結果イヌワシが定着性の強いこと、および行動域の凡その大きさ、生息地の条件（植生、地形）などがわかりつつある。それらをもとにアンケートおよび現地調査の結果明らかとなった分布から、生息地を推定を含めてプロットすると第7図のように19か所が考えられる。それぞれについて、場所および主な記録を以下に記しておく。

a 地区

医王山を中心とする地域が生息地と考えられる。最近の記録としては、現地調査により1978年9月24日成鳥2羽、幼鳥1羽。同年10月1日と11月1日に成鳥1羽ずつ観察している。またアンケートか



第7図 イヌワシ生息地分布

ら、1972年3月および1974年1月に1羽ずつ観察されている。この地域には戦前に捕獲例があり、「鷺ノ巢岩」と呼ばれていたところがあったということで古くから生息していたことが考えられる。

b 地区

内川ダム周辺を中心とする地域が生息地と考えられ、現地調査で1978年9月12日成鳥1羽を観察している。その時の飛行の方法、コースなどからこの地域に定着していると考えられる。また1959年7月に幼鳥の捕獲例がある（市川1965年）。

c 地区

犀川ダムおよびその下流付近が生息地である。現地調査で多くの観察例があり、その主なものは1977年9月21日成鳥2羽・亜成鳥1羽、1978年5月26日亜成鳥1羽、同年11月19日2羽、1979年1月10日成鳥1羽・亜成鳥1羽、同年12月1日2羽などである。巣を1か所発見しているが、番の1羽が亜成鳥だったためか、最近の繁殖は未確認である。なお年月は不明であるが以前に繁殖したことがある（熊野・木村1970）。この地区は前に述べたように、トランシーバーを使用した観察で、e地区と同時に別々の番をみているところである。

d 地区

内川ダムの上流付近が生息地と考えられ、アンケート調査で1977年6月5日1羽、聞き込み調査で1978年5月31日1羽ずつ4回の観察が報告されている。

e 地区

犀川ダムの上流地域を生息地としている。この地区ではアンケート調査による観察例も多く、その結果古くから生息していたと考えられる。最近の現地調査の主なものは1977年10月19日2羽、1978年5月27日成鳥2羽、同年11月28日成鳥2羽、1979年5月10日成鳥2羽、同年12月5日3羽（成鳥2羽、他に1羽）などである。1974年5月13日に雛のいる巣を発見し、5月31日～6月2日のいずれかに巣立った。その幼鳥と成鳥2羽の家族群を同年7月22日に観察している。この地区では行動追跡により、番の行動域が判明しつつある。

f 地区

直海谷川流域を生息地していると考えられる。アンケート調査によると大正時代から生息していたようで、また最近の記録としては1977年7月17日成鳥2羽、1978年3月5日2羽の報告がある。

g 地区

瀬波川流域が生息地と考えられ、アンケート調査により明治時代から生息していたようである。最近の記録としては1978年10月11日に現地調査で成鳥2羽を観察している。

h 地区

尾添川の支流雄谷川流域を生息地としている。ここは地元の人に「雄谷の黒鷲」として昔から知られているところである。現地調査により1977年6月19日成鳥1羽、同10月2日成鳥1羽、1978年11月6日成鳥2羽、1979年5月3日成鳥2羽、11月7日成鳥1羽などを記録している。この地区と次の i 地区でも同時に別々の番を観察している。

i 地区

蛇谷川流域を生息地としている。アンケート調査による観察例も多く、昔から生息の知られているところである。現地調査の記録の一部を挙げると、1977年4月27日成鳥2羽、同年9月18日成鳥2羽、1978年6月30日成鳥1羽、同年10月8日成鳥2羽、幼鳥1羽、1979年6月23日成鳥2羽、同年12月21日成鳥2羽などがある。1978年に1羽巣立っている。なお2か所に巣を発見しているが、それは近年使用されておらず、別の所に巣の存在が考えられる。

j 地区

梯川流域の大倉岳、動山周辺地域が生息地と考えられる。アンケート調査で1976年9月成鳥1羽、1974年幼鳥1羽などの記録があり、また当地で捕獲されて剥製となっているものがある。またこの地区に隣接する動橋川流域の三童子山で、1959年4月11日に巣から幼鳥が2羽捕獲されている。(市川1959)。その後の記録がないが、j 地区とはまた別の番の生息の可能性もある。

k 地区

大日川の支流杖川流域を生息地としている。最近の記録としては、現地調査で1977年5月19日成鳥1羽・亜成鳥1羽、1978年10月11日亜成鳥1羽を観察している。アンケート調査でも1977年5月14日2羽などの他に記録が多く報告されている。また捕獲例や巣の観察例の古い記録が知られているが、現在それらの巣は使用されていない。

l 地区

手取川ダムの上流部において1979年2月11日成鳥1羽が記録されている(橋1979)。アンケートおよび現地調査での記録はないが、ダム湖左岸大嵐谷、小嵐谷付近に生息している可能性がある。

m 地区

尾添川の支流目附谷川流域に生息地が考えられる。アンケート調査による、1977年8月18日成鳥1羽・幼鳥1羽の記録があり、聞き込み調査からも生息の可能性が大きい。

n 地区

尾添川の支流中ノ川および丸石谷川付近に生息地が考えられる。アンケート調査で1977年5月成鳥1羽、1976年8月7日成鳥1羽の記録がある。また1974年7月31日2羽を現地調査で観察している。

o 地区

大聖寺川中流域の刈安山周辺に生息地が考えられる。アンケート調査で1978年1月上旬、同2月、1975年5月いずれも1羽の報告がある。

p 地区

大聖寺川流域の富士写ヶ岳から上流の地域に生息地が考えられる。アンケート調査で、1973年6月3日成鳥2羽の報告があり、他にもこの地域に記録年月日は不明であるが、アンケートや聞き込み調査による報告がある。

q 地区

大日山の北部、動橋川および梯川の上流地域に生息地が考えられる。現地調査で1978年11月8日1羽の記録があり、記録年月日は不明であるがアンケート、聞き込み調査による報告が数例ある。

r 地区

牛首川の上流湯の谷付近を生息地としている。現地調査で1978年10月6日成鳥2羽を観察しており、アンケート調査で1978年6月2日1羽、1977年7月20日1羽などの記録がある。

s 地区

牛首川上流、三ッ谷川流域に生息地が考えられる。現地調査で1978年10月6日2羽を観察している。

〈個体数〉

以上19か所の生息地の他にも今後の調査で新たに発見される可能性があるが、現時点での県内におけるイヌワシの個体数を次に考えてみる。イヌワシは番の一方が死ぬまでは同じ2羽で生活し、また幼鳥は巣立ち後秋までは親の生息地にいて次の繁殖期が始まると追い出されるといわれるが、その後遠くへ移動するのか、親の生息地の周辺部にいるのかなどは明らかでない。また1羽だけの記録をどのように判断するか、つまり番の一方だけを見ているのか、番の相手がいない個体なのか、それとも生息地の定まらない周辺部の個体とみるのかなども個体数を算出する場合検討を要することである。これらは今後の調査で明らかにしていくことにしここでは便宜的に以下のように算出してみる。はじめに現地調査による記録で、それが短期間に集中している1978年9月から同年11月までの3か月間に限って集計すると第6表のように個体数は21羽（幼鳥2羽、亜成鳥1羽）となる。これに最近の現地調査、アンケート、文献などの記録で、互いに重複しないと考えられるものを加え、それぞれの生息地での最大数で算出すると個体数36羽となる。また19か所の生息地の全てが番の2羽でいると仮定するならば少なくとも38羽となり、これに幼鳥や周辺部の個体が加算されることになる。

第6表 イヌワシ個体数集計表

地区 期間		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	計
1978, 9 ┆ 1978, 11	成 鳥	2	1	(2)		2		2	2	2				1				1	2	(2)	21
	亜成・幼鳥	1								1	1										
1973, 6 ┆ 1979, 12	成 鳥	2	1	2	(1)	2	2	2	2	2	1	1	1	1	(2)	(1)	2	1	2	(2)	36
	亜成・幼鳥	1		1		(1)				1	1		1								

(注) () 内は区別不明。1978.9~1978.11は現地調査の記録のみ、1973.6~1979.12はこれにアンケート、文献等の記録も含めた個体数。〈生息地〉参照。

IV お わ り に

イヌワシの県内での分布と個体数の大要をつかむことができたが、まだ調査の十分でない地域も多い。今後は遅れている地域の現地調査を行なうとともに、現在進めている行動域や縄張りの面積および植生や地形などとの関係について調査し、数少ないこの鳥の保護対策を立てるための資料とする予定である。

文 献

- 市川昌徳 (1947) イヌワシを剥製して, 野鳥, 第12巻, 第4号, 6-7
—— (1959) 鷲, 野鳥, 第24巻, 第3号, 59
—— (1965) 県鳥狗鷲談義, 観光と芸能, 第22号, 13
熊野正雄・木村久吉 (1970) 白山の鳥類, 白山の自然, 240, 石川県
重田芳夫 (1974) 東中国山地のイヌワシ, 東中国山地自然環境調査報告, 106-140,
橘 映州 (1979) 手取川流域 (女原~白峰) の鳥相, 手取川ダム周辺の環境調査報告書, 76-92
立花繁信 (1969) 翁倉山のイヌワシの生態について, 宮城県の生物, 113-128
横山政和 (1866) 釜清水村・河原山村, 小松近郷巡見道之記

Summary

The distribution and the population of the Japanese golden eagle (*Aquila chrysaetos japonica*) in Ishikawa prefecture were studied by the methods of the field survey, questionnaire and so on. The field survey was carried out from April 1977 to December 1979. In the questionnaire date of the observation, nest-sites and capture records were come out. The range of the distribution is restricted in the mountain area from the middle to the south part of this prefecture. 19 home ranges are estimated and 36 eagles are counted out.

(別表)

イヌワシのアンケート調査用紙

○ご 芳 名 (才) ○ご 職 業
 ○ご 住 所 ○ご勤務先又は所属団体名

1. 今までにイヌワシ(らしい鳥)を見たことがありますか。(イヌワシは地方によってワシまたはオオワシとよばれています。)

見たことが..... ある、ない

「ある」とお答えの方は2以下について、「ない」とお答えの方は8以下について、ご回答下さい。

2. 見たときの状況についてお答え下さい。

① いつ見ましたか。(第1例) (第2例) (第3例)

<回答例> 昭和30年頃の春、昭和58年1月1日

② 場 所

<回答例> 白山の岩間道2,000m付近地獄谷上空、小松市大杉町地内動山西斜面

③ 何羽でしたか。

<回答例> 1羽、親鳥2羽、幼鳥1羽

④ どこにいましたか。

<回答例> はるか上空、頭上近く、樹上、地上

⑤ クマタカやトビと間違えられやすいといわれていますが、どんな点からイヌワシと判断されましたか。(図示でもよろしいです)。

<回答例> 黒っぽくトビよりひとまわり大きかった。翼の幅が広く尾羽の先端が丸味をおびていた。

⑥ どのような飛び方でしたか。

<回答例> 輪を描いて、一直線に、翼をはばたき続けて、翼をふらつかせて、急降下して

上馬：石川県におけるイヌワシの分布および個体数

㊦ そのときの鳴き声、行動などお気づきの点をお書き下さい。

＜回答例＞ キョ、キョと鋭く鳴きながら同じ所を回っていた。

㊧ そのときの同行者がありましたら、その方の住所、氏名をお書き下さい。

8. イヌワシがいる、または昔いたことがあるという話をお聞きでしたらお答え下さい。

㊨ いつごろ (第1例)

(第2例)

(第3例)

㊩ どこで

㊪ 誰の話ですか。

㊫ 具体的な話の内容

4. 現在イヌワシのはくせいを持っているところや持っている人をご存じでしたらお教え下さい。(住所、氏名)

